

多様な事業と人々をつなぐ、 三菱電機のオープンなデザインシステム — Serendie Design System の設計思想と オープン化・知財戦略 —

三菱電機株式会社 DXイノベーションセンター システム連携企画部 柴田博彬

1 デザインシステムという時代の潮流

デザインシステムとは、カラー・タイポグラフィ・スペーシングなどの視覚要素を「デザイントークン」として定義し、再利用可能なUIコンポーネントと組み合わせることで、プロダクト開発の効率化と品質の一貫性を同時に実現する仕組みである。GoogleのMaterial Design、MicrosoftのFluent Design Systemなど、大手テック企業が主導してきたデザインシステムの潮流は、日本国内の企業にも着実に広がりつつある。

この分野の変遷を振り返ると、1990～2000年代のGUIガイドライン期、2014～2018年の標準化と再利用を重視したデザインシステム期を経て、現在は「トークン駆動・AI連携期」と呼ぶべき新たな段階に入っている。AIによるコード生成が本格化し、デザインと開発の境界が急速に溶け始めているこの転換点において、デザインシステムは単なる「画面作成のルール集」を超え、企業競争力を左右する戦略的資産としての意味を持ち始めている。

こうした潮流の中、2024年11月、三菱電機株式会社は自社の「Serendie Design System（以下、SDS）」を社外に向けて広く公開した。2025年度グッドデザイン賞ベスト100を受賞した本取り組みは、単なるUIツールの整備にとどまらず、組織のカルチャー、知財戦略、そして共創のあり方を根本から変革しようとする大きな試みである。

2 「家電から宇宙まで」をつなぐ多様性と構造的課題

三菱電機は、家電からビルシステム、FAシステム、空調、自動車機器、さらには防衛宇宙システムに至るまで、極めて幅広い事業領域を持つ。この事業の多様さは企業の強みである一方、デジタルプロダクトのUI開発においては大きな課題をはらんでいた。

従来、UI開発は事業領域ごとに独立して行われていたため、デザインの一貫性が保たれず、ある事業部で蓄積された優れたUI/UXの知見が他の事業部に波及しないという「サイロ化」が生じていた。また、単独従業員数約3万人にのぼる巨大組織ゆえに部署間の壁は高く、デジタル人材（特にUI/UXデザイナー）の慢性的な不足も相まって、スピーディーで柔軟なものづくりが難しくなっていた。

この課題を打破すべく、三菱電機はDX（デジタルトランスフォーメーション）のためのデジタル基盤および共創空間「Serendie®（セレンディ）」を立ち上げた。[図1(次頁)]（「Serendie」という名称は、偶然のひらめきや出会いを意味する「Serendipity」と、「Digital Engineering」を掛け合わせた造語）。データ分析やAPI連携などの技術基盤、そして人材・共創基盤を体系的に整備する構想の中で、SDSはSerendieのプロジェクト推進基盤として位置づけられた。多様な製品・サービスから得られた知見を集約し、顧客との接点となるデジタルプロダクトの品質と開発速度を担保する、いわばデジタル共創のための「共通言語」としての役割である。